

論文

川柳詩への道

—R.H. ブライスの禅とユーモアの比較文学研究—

平 辰彦

The Way toward the Poetry of Senryu:

A Study on the Comparative Literature about the Zen and Humour of R. H. Blyth

TAIRA, Tatsuhiko

Abstract

This is the study on the comparative literature about the Zen and Humour of R. (Reginald) H. (Horace) Blyth (1898-1964).

I would like to treat of the Blyth's translations of the Senryu (Japanese Satirical Verses) focusing on the Zen and Humour.

When Blyth looked back at his life, he found that he was led by his 'inner destiny' to pass through certain phases. These phases included 'an inborn animism'; a natural passage to vegetarianism; the discovery of the Way of Haiku; and Zen, through the books of Daisetz Suzuki. The final phase was the Way of Senryu.

Blyth was born at 93, Trumpington Road, Leytonstone in Essex, England on 3 December 1898. His father worked as a clerk for the Great Eastern Railway. The family was poor, and Blyth would tell how he used to run along station platforms selling chocolate to train passengers: something which gave him an enduring passion for chocolate.

One of the first significant events of his life occurred in 1916, during the First World War, when at the age of 18 he became eligible for conscription.

He declared himself a pacifist and was imprisoned in Wormwood Scrubs.

When the war came to an end, Blyth entered London University, where he read widely in English literature. Akio Fuji (1898-1940) had come to study at London University. Fuji searched for some good person to teach at Keijo, which was what Seoul was called in those days when the whole of Korea was under Japanese domination. Fuji met Blyth and asked him to accept his proposal. Blyth did accept so straight Fuji's proposal without hes-

itation. In 1924 he left England to take up a post as assistant professor at Keijo University.

It was in Korea that Blyth became seriously interested in Japanese culture, and Zen Buddhism in particular. He was deeply affected by Daisetz Suzuki(1870-1966)'s *Essays in Zen Buddhism (First Series)*, which he read in book form in 1927. He set about learning Japanese Haiku. He read Asataro Miyamori (1869-1952)'s *An Anthology of Haiku, An Ancient and Modern* (1932), and was interested in Haiku (Japanese epigrams) and Senryu (Japanese satirical verses).

In 1937 he met a Japanese woman, Tomiko in Soul. He proposed to her, and were married the same year. She brought him great happiness in the form of children—two girls, Harumi and Nana.

When World War II broke out in 1939, Blyth left Korea for Japan with his wife and daughter and settled in Kanazawa. But when Japan entered the war, he was interned as an enemy alien, and for the next four years lived in comparatively easy conditions in a house called Mark's House near the Tor Road in Kobe.

With the arrival of the American occupation forces, Blyth was freed and was able to play a significant part in the peace process, to the benefit of Japan. After the war, he and Harold G. Henderson(1889-1974) were prominent go-betweens in the cause of peace between Japan and the Allies.

Henderson, also, a haiku scholar, was on the staff of General Mac Arthur's GHQ. Blyth went to see him, and learnt that Mac Arthur wanted to close down Gakushuin University. Blyth persuaded him to let it continue, opening it to the general public. Blyth began teaching at Gakushuin University after the war. At the same time, Blyth became private tutor to the Crown Prince Akihito, and was to say that the Prince was the pupil he taught longest.

Blyth's first book, *Zen in English Literature and Oriental Classics* was published in 1942 in the midst of the war. In the prison Blyth went on to write parts of the volumes on Haiku and Senryu.

The first editions of Blyth's four volumes of Haiku translations and commentaries, published between 1949 and 1952 by Hokuseido. He wrote assiduously: *Senryu* (1949), *Japanese Humour* (1954), *Oriental Humour* (1959), *Japanese Life and Character in Senryu* (1961) and so on.

Blyth demonstrated that Zen is poetry through English translations of Haiku and Zen is humour through English translations of Senryu.

A feature of Zen and Humour are admitted on the translations of Blyth's Haiku and Senryu through in these works.

The question whether Senryu is poetry or not has been debated by Japanese critics ever since the inception of Senryu.

If it were accepted that Haiku is poetry, it would not be difficult to prove that Senryu is poetry.

I conclude that Blyth was a cosmopolitan who practiced the Zen Buddhism and harmony & combination of cultures from a comparative point of view.

要 約

この論文は、比較文学の視点から「禅」と「ユーモア」に焦点をあてR.H. プライスの英語による川柳の翻訳を考察したものである。戦前までの川柳の英語による翻訳の系譜を辿り、戦後のプライスの川柳の翻訳が、それ以前の日本人による翻訳とどのように違うのかを原句と比較しながら、考察した。

形式の面では、プライスの川柳の翻訳は、俳句の翻訳と同様に三行形式で訳されている点に特色がある。

ブライスの俳句や川柳の翻訳には、「禅は詩」であり、「禅はユーモア」であるという視点が強くあらわれている。

ブライスは、俳句の翻訳を通して「禅は詩」であるという視点を表明し、川柳の翻訳を通して「禅はユーモア」であることを明らかにしている。ブライスにとって〈禅と詩とユーモア〉は三位一体のものなのである。

韻律の面では、ブライスの翻訳は川柳も俳句も17音よりも短い音数で創作されている。翻訳に用いられる言葉は、口語的な表現が使われ、詩的な技法には、擬人法やメタファー(暗喩)などが用いられている。

ブライスは、日本人以上に川柳という文芸を俳句と対等に論じ、両者の相違点を理解した禅の実践者であり、比較文学の視点を身につけた、日本と西洋の融合文化を実践した国際人であったと結論づけることができる。

キーワード

日本文化 (Japanese Culture)

川 柳 (Japanese Satirical Verses)

禅 (Zen Buddhism)

ユーモア (Humour)

融合文化 (Harmony & Combination of Culture)

1. はじめに

川柳は、18世紀の中頃、江戸ではじめられた庶民文芸である。俳句と異なり、季語や切れ字などがなく、口語を用い、主に人事を題材にした〈人間諷詠〉の〈最短詩〉である。

川柳という名称は、浅草新寺町、天台宗龍宝寺門前の名主であった初世の柄井八右衛門(1718-1790)が、川柳と号して前句附の選者として登場し、「万句合」と呼ばれる興行を始めた宝暦7年(1757)8月25日に始まるとされる。この興行は、「川柳評万句合」と呼ばれ、その「川柳評」は「川柳点」と称され、のちに「川柳」と略称されるようになる。

この名称は、4世川柳の人見周助(1778-1844)によって「俳風狂句」と名付けられ、5世川柳の水谷金蔵(1787-1858)は、「俳風狂句」を「柳風狂句」と改めた。

川柳と狂句は、明治35年まで混称されていたが、「川柳中興の祖」と呼ばれる井上剣花坊(1870-1934)と阪井久良岐(1869-1945)が登場した明治36年(1903)頃には、川柳という文芸名に定着していくのである。

明治36年7月3日、井上剣花坊が新聞「日本」に「新題柳樽」欄を設け、江戸時代の「古川柳」とは異なる「新川柳」と呼ばれる〈短詩〉が誕生する。

川柳の文芸性は、初世・柄井川柳の選句集『誹風柳多留』に収録された「古川柳」に最もよくあらわれている。そこから抽出された「穿ち」「可笑しみ」「軽味」は、明治時代に「新川柳」が登場してから、俗に「三要素」と呼ばれ、川柳創作の指標とされた。

川柳を学問的に体系化し、史的研究の基を開いた国文学者の穎原退蔵(1894-1948)は、「川柳の文芸精神」(1947)で「三要素」の内、「穿ち」以外は、それに付随する属性とみた。

戦後の現代川柳は、この「三要素」の他に「抒情性」「ドラマ性」「社会性」などが求められ、

一層、その文芸性は多様化されていったのである。

さらに川柳は、海外では、「センリュウ」(Senryu)と称され、英語をはじめ、各国語で創作される程の国際性も認められる⁽¹⁾。

海外でこのように「センリュウ」が創作される礎をつくったのが、R.H.ブライス(1898-1964)である。

英国出身の日本文学研究者であるレジナルド・ホレス・ブライスは、禅を世界に広めた鈴木大拙(1870-1966)の信奉者で禅の視点を通して俳句や川柳を翻訳し、日本の伝統的な〈短詩〉を英語圏の国々に紹介した。特に1960年代のビートニク(beatnik)のアメリカの現代詩人たちにブライスの翻訳したハイク(Haiku)やセンリュウ(Senryu)は大きな影響を与えた。

また戦後の日本においてブライスは、学習院大学の外国人教師として英語を教え、昭和天皇の「人間宣言」(1946)の英文草案を作り、戦後の皇室の存続に重要な役割を果たした。平成天皇の皇太子時代に英語の家庭教師も務めた。

このブライスの生涯は、大別して次の三期に分類することができる。

A ロンドン時代(1898-1924)

ブライスは、1898年12月3日、イギリスのエセックス州のレイトン(現・レイトンストン)トランピングトン通り93で生まれる。乳幼時代には、イルフォードで育ち、少年の頃は昆虫採集に熱中。父親は鉄道員。ブライスは駅で少年時代、チョコレートを売って家計を助けた。

1916年、18歳で菜食主義者となる。この年、第1次世界大戦の兵役忌避のため、ロンドンの監獄に1919年まで収監。22歳でロンドン大学に入学。英文学専攻。1923年に卒業。日本人の留学生・藤井秋夫(1898-1940)の勧めで朝鮮の京城で英語の教師となる。

B 朝鮮時代(1924-1940)

ブライスは1924年9月より京城帝国大学予科で授業を始め、1926年より、京城帝国大学で英文学の講義を行う。翌年、ブライスは鈴木大拙(1870-1966)の著書(「禅仏教に関する諸論」第1集)を通して「禅」の思想に感動し、以後、鈴木大拙の信奉者となる。

1932年、宮森麻太郎(1869-1952)の英文『古今俳句集』(*An Anthology of Haiku, An Ancient Haiku and Modern*、丸善)が出版され、ブライスは、この英文による俳句の本を読み、日本の俳句と出会う。翌年、ブライスは藤井秋夫の夫人に俳句の手ほどきを依頼する。

1937年3月、17歳年下の山口県萩市生まれの日本人の来島富子(1915-1981)と結婚。ブライスは、39歳、富子、22歳。

1938年、鈴木大拙は、英文『禅と日本文化』(*Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture*)を刊行する。

また同年、ブライスは、臨濟宗、花園妙心寺の京城別院で華山大義老師について参禅を始め

(1) 復本一郎ほか編、『現代俳句ハンドブック』、雄山閣、1995、平宗星「川柳」の項、p.202.

る。ブライスの華山老師への尊敬の念は強く、『禪と英文学』（1942）の献辞で「朝鮮の妙心寺の京城別院の花山大義老師がおられなかったら、私は禪のことは何も知らなかったろう。」（Kayama Taigi, Rôshi of Myoshinji Betsu-In, Keijô, Chôsen, but for whom I should have known nothing of Zen.）と述べている。

この頃、ブライスは、初めて日本語で「葉の裏に青き夢見るかたつむり」（A snail / Dreams a blue dream / On the back of a leaf）を作る。

翌年9月、イギリス、フランスがドイツに宣戦、第2次世界大戦が始まる。

C 日本時代（1940—1964）

ブライス夫妻は、1940年4月、日本へ移住。1941年10月、ブライスは、金沢で初めて鈴木大拙と会う。同年12月、太平洋戦争起こる。翌年12月、はじめての英文の著書『禪と英文学』（*Zen in English Literature and Oriental Classics*）を北星堂書店より出版する。ブライス、44歳。

1945年8月、日本敗戦。同年11月、学習院大学の外国人教師となる。12月、天皇の「人間宣言」の英文草案を作る。翌年1月1日、天皇の「人間宣言」の日本語を発布。同年4月、皇太子（現・平成天皇）の英語の個人教授となる。

1949年4月、英文『俳句（*Haiku*）』（第1巻）を北星堂書店より刊行する。同年11月、英文『川柳—日本の諷刺詩—（*Senryu Japanese Satirical Verses*）』を北星堂書店より刊行する。ブライス、51歳。

翌年8月、英文『俳句（*Haiku*）』（第2巻）を刊行する。同年10月、吉田機司（1902～1964）と共著で『世界の諷刺詩川柳』を日本語で刊行する。

1952年1月、英文『俳句（*Haiku*）』（第3巻）を刊行する。同年5月、英文『俳句（*Haiku*）』（第4巻）を刊行する。

1954年11月、東京大学より『禪と英文学』および『俳句』（全4巻）により、文学博士の学位を授与される。主査は、麻生磯次（1896～1979）、副査は斎藤勇（1887～1982）である。

1961年2月、『川柳にみられる日本人の生活と気質』（*Japanese Life and Character in Senryu*）、同年9月に『江戸川柳』（*Edo Satirical Verse Anthologies*）を刊行する。1964年10月28日、ブライスは逝去する。享年65歳。戒名は、「不來子古照心居士」。

本稿は、ブライスの川柳の翻訳を中心に英語による川柳の翻訳の歴史を概説し、川柳の翻訳がどのようにおこなわれてきたかを、比較文学の視点を通して禪とユーモアに焦点を当て考察したものである。

本稿の目的は、ブライスの川柳の翻訳を通して日本文化を代表する短詩型文学の川柳に禪の精神とユーモアが、いかに融合しているかを明らかにすることにある。

2. 英譯川柳における翻訳の歴史

川柳が英語に翻訳され、一冊の本として出版されたのは、大正13年（1924）11月15日発行の『英譯川柳名句選』（日州新聞社印刷部）を嚆矢とする。この表紙には、日本語の題名と共に次のような英語表記がつけられている。

SENRYU
short witty odes

この英語表記から翻訳者が川柳を「短い機知に富む頌歌」（short witty odes）と規定していることがわかる。「頌歌」（odes）とは、特定の人・物に呼びかける形式の抒情詩をさす。上床新助と成見延亀の共訳で川柳の翻訳がおこなわれた。ここには、冒頭に初世・柄井川柳の肖像画が掲げられている。「はしがき」には、柄井川柳によって川柳という文芸が興ったことが記され、次のように川柳を評している⁽²⁾。

一般社会の空気と民衆の感情とを芸術にて表したるものを民衆芸術とせば、川柳の如きは、実にその第一位を占むべきものならずや。

翻訳者は、この「はしがき」で川柳を「民衆芸術」として高く評価しているが、大正時代には、アメリカの民衆詩人ホイットマン（1819-1892）の『草の葉』が日本の民衆詩人たちによって翻訳され、「民衆芸術」論が盛んに流行した。

川柳界でも井上剣花坊が大正8年（1919）に南北社から川柳論『川柳を作る人に』を刊行し、そこで川柳を「世界に類を見ない民衆芸術」として捉えている⁽³⁾。

「はしがき」では、「詩歌俳句の英譯は其数甚だ多しと雖も川柳の英譯は未だ世にあらず」（p.2）とこの「英譯川柳」が本邦初のものであることを表明している。

また川柳を英譯するにあたって翻訳者は、『誹風柳多留』から選んだ300句に「如何にして川柳独特の機知とユーモア」（p.3）を表現するかに苦心したことが述べている。次の「古川柳」の英譯を一例としてあげてみる⁽⁴⁾。

Suckling a child in bed
the wife said to her husband,
“you will find some sardine
in the cupboard.”

(2) 成見延亀・上床新助共訳、『英譯川柳名句選』、日州新聞社印刷部、1924、p.1.

(3) 平宗星、「井上剣花坊とホイットマンの比較研究—民衆詩としての川柳形式をめぐって—」、川柳学会、『川柳学』、第2号、新葉館出版、2006年、pp.31-38.

(4) 成見延亀・上床新助共訳、前掲書、p.157.

この「英譯川柳」には、日本語による次の原句もつけられている。

添乳して棚に鰯がござりやす

「英譯川柳」では、「鰯」を「サーディン」(sardine)と訳しているが、西ヨーロッパの沿岸にも「鰯」がおり、その幼魚は油づけの缶詰にされる。したがって英米人は、この「サーディン」の語から「缶詰の鰯」(canned sardines)を連想するかもしれない。この「英譯川柳」では、日本人の「鰯」に抱く庶民感情や、そこにあらわれた生活感までは、英米人に伝えることができな
いと思われる。

また「添乳して」を「寝床で子どもに乳を飲ませながら」(Suckling a child in bed)と訳されているが、英米人には、「添乳」の慣習がないために原句の「古川柳」から感じられる日本的な母子の情愛は、この「英譯川柳」からは感じられない。

さらに原句の「古川柳」では、「棚に鰯がござりやす」と言ったのは妻であり、そう言われたのは夫であることは自明の理であるが、「英譯川柳」では、誰が誰に言ったのかを説明する一行(the wife said to her husband)が説明的に挿入されている。

この「英譯川柳」には、「古川柳」の背景にある江戸庶民の生活感情が表出されておらず、「古川柳」の翻訳の難しさを端的に示した一例といえる。

ブライスは、昭和24年(1949)に北星堂から英文『川柳』を刊行するが、これは、ブライスが川柳について書いた最初の著書であり、世界で初めての外国人による「英譯川柳」である。

ブライスはこの著書で川柳を「日本の諷刺詩」(Japanese Satirical Verses)と捉えている。川柳の国際性を英語による川柳の翻訳およびその紹介と考えると、海外に英語で川柳を紹介したブライスのこの著書の与えた影響は計り知れない。そこには、「添乳して」の「古川柳」が、次のように翻訳されている⁽⁵⁾。

Giving the baby the breast,
“On the shelf
You’ll find some sprats.”

このブライスの「英譯川柳」には、日本語で表記された「古川柳」の原句とそのローマ字による表記が併記されており、谷脇素文(1878-1946)の描いた「川柳漫画」が添えられている。この素文の絵は、この「古川柳」の句意を理解する上で役立っているが、絵の情景は江戸時代のも
のではなく、現代ふうの夫婦の姿になっている。夫婦の背後には、丸いテーブルが置かれてお
り、夫は洋服を着て、片手に帽子を持った姿で描かれている。

このブライスの「英譯川柳」では、三行表記が採用されているが、この形式は、以後、川柳の翻訳や俳句の翻訳にも踏襲されていくのである。

ブライスの俳句や川柳の翻訳では、韻律が原句の17音よりも短い音数になっている。

(5) R.H. Blyth, *Senryu Japanese Satirical Verses*, the Hokuseido press, 1945, p.90.

「添乳して」の「英譯川柳」には、解説が6行ほど英語でつけられている。ブライスは、妻の言う「ござりやす」という言葉に注目し、この言葉は、妻が結婚する前に遊郭にいた女性 (prostitute) の一人であることを示していると述べている。

昭和39年(1964)には、ペンギン・ブックスから『日本の詩歌』(*Japanese Verse*)が刊行された。この川柳の翻訳では、三行表記が採用されており、ブライスの「英譯川柳」の影響を受けていると考えられる。そこには、60句の「古川柳」が紹介されているが、その中には、「添乳して」の「古川柳」が、次のように翻訳されている⁽⁶⁾。

She suckles her baby:
“On the shelf
You’ll find some sardines.”

ブライスが「鯛」の訳語に「スプラッツ」(sprats)を用いているのに対してこの「英譯川柳」では、「サーディンズ」(sardines)の語が用いられている。

海外において川柳の翻訳が本格的におこなわれるのは、ブライスが『川柳』を刊行した以降だが、日本では、昭和の時代に入り、川柳の翻訳が組織的に行われた。昭和12年(1937)7月14日に川柳きやり社人であった阿部佐保蘭(1906-1968)が「川柳翻訳研究会」を発足させ、川柳の翻訳研究が組織的におこなわれるようになったのである。同年9月20日には、機関紙『SHK』(創刊号)が創刊されている。この「川柳翻訳研究会(SHK)」の顧問には、英文学者の宮森麻太郎をはじめ、『川柳きやり』主宰の村田周魚(1889-1967)、『川柳雑誌』主宰の麻生路郎(1888-1965)らが名を連ね、賛助会員9名、会員16名で、この「川柳翻訳研究会」は出発した。

川柳の翻訳の歴史については、昭和41年(1966)11月、阿部佐保蘭が出版した『川柳と翻訳』(中央公論事業出版)に詳しく紹介されている⁽⁷⁾。この『川柳と翻訳』によれば、大正時代、川柳の英語による翻訳は『英譯川柳名句選』の出版された翌年(1925)に創刊された『やなぎ樽研究』にU.S.生(上床新助)による「英譯川柳」が創刊号から20号まで毎号3句、計135句が掲載された。

昭和10年代には、阿部佐保蘭を中心に「川柳翻訳研究会」に名を連ねた面々によって「英譯川柳」が推進されていく。例えば、昭和8年(1933)5月に発行された『川柳雑誌』(116号)と同年10月に発行された『川柳雑誌』(121号)には、主宰者の麻生路郎が「五七五の翻訳」と題して川柳の翻訳について書いており、昭和12年5月に発行された『川柳きやり』には、阿部佐保蘭の「川柳の翻訳に就いて」が掲載されている。

昭和12年7月14日、東京・神田の如水会館で「川柳翻訳研究会」の創立記念句会が開催された。宮森麻太郎は、そこで「西洋の最短詩エピグラムと俳句と川柳」と題する講演を行った。

昭和25年(1950)4月に発行された『川柳雑誌』には、阿部佐保蘭が「堀英四郎先生と語る一

(6) Geoffrey Bownas and Anthony Thwaite (trans.), *The Penguin Book of Japanese Verses*, Penguin Book, 1964, p.132.

(7) 阿部佐保蘭, 『川柳と翻訳』, 中央公論事業出版, 1966, pp.1-238.

ブライス教授の英訳川柳に就いて」と題するエッセイが掲載されている。このエッセイでは、前年に刊行されたブライスの英文『川柳』に収録された「英訳川柳」が取り上げられている。

ブライスは、英文『川柳』（1949）を皮切りに昭和25年10月には、吉田機司（1902-1964）と共著で『世界の諷刺詩川柳』（日本出版協同株式会社）を刊行する。

昭和26年（1951）11月に発行された『川柳雑誌』には、麻生茂乃（1893-1981）が「川柳の英訳に就いて」と題するエッセイが掲載されている。

昭和34年（1959）5月には、ブライスは英文『東洋のユーモア』を刊行する。この著書では、中国と韓国と日本のそれぞれの「ユーモア」が取り上げられている。

昭和36年（1961）2月には、英文『川柳における日本人の生活と性格』では、川柳の歴史を江戸時代から明治・大正・昭和の各時代に至るまで、それぞれの時代を代表する作品を取りあげながら、そこにあらわれた日本人の生活と性格を概観する。またこの著書では、川柳の「ユーモア」や「詩性」についても解説され、最終章では、「二人の明治川柳詩人」と題して川柳における「中興の祖」といわれる井上剣花坊と阪井久良岐について論じられている。

明治36年9月にブライスは、英文『江戸川柳』を刊行する。この著書では、18世紀の江戸で刊行された慶紀逸の『武玉川』と対比しながら、『誹風柳多留』を紹介している。

英語圏で生活する英米人は、こうしたブライスの著作を通して俳句と共に川柳についての理解を次第に深めていったのである。

ブライス以降の川柳の翻訳には、次のようなものがある。

昭和39年（1964）には、Geoffrey BownasとAnthony Thwaiteの共訳によるペンギン版の『日本の詩歌』（*Japanese Verse*）が刊行される。ここには、「古川柳」の翻訳が60句収録されている。

昭和61年（1986）には、コー・ヴァン・デン・フーヴェル編『ハイク アンソロジー：英語によるハイクとセンリユウ』（*The Haiku Anthology: Haiku and Senryu in English*）が刊行される。この本は、Harold G. HendersonとR.H. Blythに捧げられている。この「序文」では、「ハイク」は「自然」（nature）と「季節」（seasons）を対象にするが、「センリユウ」は「人事」（human nature）を対象とすると述べられている。そして「センリユウ」を次のように定義する⁽⁸⁾。

- (1) 川柳は俳句と同じ形式の日本の詩（a Japanese poem with the same form as the haiku）だが、人事（human nature）や人間関係（human relationships）に関わり、通常、「諧謔的」（humorous）で「諷刺的」（satiric）である。
- (2) 英語センリユウ（English language Senryu）は英語のハイクと同じ形式だが、英語センリユウには、「まじめな」（serious）センリユウと「諧謔な」（humorous）センリユウあるいはその両方が融合されたものがある。

この定義にみられるように英語センリユウは、英語ハイクと同じ形式が用いられており、両者を明確に区別するのは、きわめて難しい。

(8) Cor Van Den Heuvel (edited), *The Haiku Anthology: Haiku and Senryu in English*, Simon & Schuster, 1986, p.357.

この『ハイク アンソロジー』では、「まじめな」センリュウや「諧謔的な」センリュウを創作するセンリュウ作家が最近では、次第に多くなっていると述べられている。例えば、英語センリュウを書く最も優秀なセンリュウ作家としてジョージ・スウィードの名を挙げることができる。スウィードの英語センリュウには、次のような三行表記の作品と一行表記の作品がある⁽⁹⁾。

Dawn
the face in the mirror
never smiles

鏡の顔
微笑まぬ
夜明け (平 宗星訳)

Mental hospital my shadow stays outside

精神病院 わたしの影が外にいる (平 宗星訳)

どちらの作品にも現代人の心の底に潜む深層心理がメタファー（暗喩）による比喩表現によって、巧みに描かれている。特に「精神病院」の作品は、14世・根岸川柳（1888－1977）や川柳作家の中村富二（1912－1980）の次の現代川柳を彷彿とさせる。

影法師いちどは俺に跨がせろ 14世・根岸 川柳

私の影よ そんなに夢中で鯛を喰ふなよ 中村 富二

戦後の現代川柳には、14世 根岸川柳や中村富二の川柳作品にみられるように人間の深層心理をメタファーなどの独自の比喩表現を用いて描いているものが多い。

16世 青田川柳（別号・煙眉）の次の現代川柳は、シュールレアリスム（超現実主義）の手法を用いて終戦直後の日本人の心象風景を巧みに描いている。

牛のマンドリンを聞く騎兵一秋の胃 16世・青田 川柳

大学で心理学を講じているスウィードの英語センリュウには、こうした日本の現代川柳と共通する表現技法や心理描写が認められる点でとても興味深い作品である。

平成2年（1990）の『川柳 番傘』（1月号）には、速川美竹の「外国人から見たR.H. ブライスのことなどー」が掲載された。同年8月には、新潟市の柳都川柳社から『速川美竹の英訳川柳』

(9) 同上, p.239.

が刊行される。この速川美竹の著書は、日本人による現代川柳の英訳単行本の最初のものといわれている。ここには、132句の現代川柳の「英訳川柳」が収録されている。収録された「英訳川柳」には、すべてに短いコメントが日本語でつけられている。例えば、柳都川柳社の代表的な女性川柳作家であった宮川蓮子（1932-2006）の「ほおずきをならずと虹が見えてくる」の現代川柳は、次のように訳されている⁽¹⁰⁾。

When I blow a ground cherry,
The rainbow
Comes in sight.

翻訳者の速川美竹は、イギリスの詩人ワーズワースの「大空に虹を見る時わが胸は躍るよ」(My heart leaps up when I behold / A rainbow in the sky:)を連想し、「虹」を「幼い時代」のメタファーと解釈する。この作品には、石丸弥平によるほのぼのとした挿絵がつけられている。

平成3年（1991）には、J.C. Brownの『川柳』(*Senryu: poems of the people*)がタトル商会(Charles E. Tuttle Company)から刊行された。この著者は、インディアナ大学の美術科を卒業し、来日し、日本の変体仮名に興味を持った。この著書はそれを発表した美しい川柳英訳集である。

18世紀から20世紀初頭までの43句が掲載されている。各2頁で三行表記または二行表記の形式で英訳し、活字の英語、ローマ字にブラウン自身の筆による墨絵と変体仮名が添えられている。例えば、井上剣花坊の「隠れゆく帆にその先の海を知る」を、次のように英訳している⁽¹¹⁾。

By the disappearing sail,
the sea beyond
is known.

平成4年（1992）には、元駐日アメリカ大使のJames D. Hodgsonの『アメリカ川柳』(*AMERICAN SENRYU*)が、ジャパンタイムス社から刊行された。これは、日本の川柳の英訳ではなく、自作の英語センリュウ集である。韻律は、17音節にこだわらず、自由訳の立場で英語センリュウを創作している。約50句が収録されている。例えば、次のような作品が収録されている⁽¹²⁾。

Endless is the need.
Short, the supply. We are left
Forever hungry.

著者は、巻頭と巻末の解説で「英文学には、川柳ほど厳密な形式と深い味わいを持ったものはない」と述べている。参考文献には、貴重な文献が紹介されている。

(10) 速川美竹、『英訳川柳 開けごま』、柳都川柳社、1990、p.64.

(11) J.C. Brown, *Senryu Poems of the People*, Charles E. Tuttle Company, 1991, p.30.

(12) James D. Hodgson, *American Senryu*, the Japan Times, 1992, p.67.

平成7年（1995）には、アランクロケット監修・撫尾清明の翻訳で奥田白虎編の『川柳歳時記』が和英対照で刊行されている。序文をドナルド・キーンが書いている。この序文では、「彼の翻訳は日本人がユーモアの心を持たないという説に終止符を打つことになるだろう。」と述べられている。撫尾清明の「英譯川柳」には、いわゆる伝的な川柳が多く収録されている。例えば、岸本水府の「ことさらに雪は女の髪へ来る」は、次のように英訳されている⁽¹³⁾。

Intentionally
Snow to women's
Hair draws.

この翻訳は、ブライス流に日本語→ローマ字→三行表記の英訳の順で印刷されている。

平成12年（2000）には、出版社のザイロから現代川柳の英訳川柳集である『万華鏡』が刊行される。48句の現代川柳とその英訳を版画入りのカードに収め、句だけでなく、評釈も英訳されている。付録には、速川美竹の「川柳駆けある記」があり、ここで美竹は川柳を「一呼吸の一行詩」（one line without a break）と述べているが、これは、六大家のひとりである麻生路郎の川柳の定義である。

この現代川柳の翻訳は、早稲田大学教授の岡田秀穂と同じく早稲田大学教授のエイドリアン・ピニングトンの二人が、約2年にわたる討論を経て翻訳されたものである。例えば、舞踊家であり、川柳作家でもある真弓明子の「昔くちづけ今は一喝して起す」という現代川柳は、次のように2通りに訳されている⁽¹⁴⁾。

- (1) once she woke him
with a kiss,
now she does it with a yell
- (2) once woken
with a kiss,
now with a yell

この現代川柳を翻訳するにあたっては、上記のような2通りの訳し方が考えられる。

(1) では、誰が誰を起こしたのかを人称代名詞を用いて性別も限定している。英米人には、こうした訳し方をすれば、句意はよくわかるが、原句のもつ味わいは消えてしまうように思われる。

一方、(2) では、原句のもつ味わいを消さないために翻訳でも不明なところは不明のまま残している原句に忠実な訳といえる。

(13) 撫尾清明（翻訳）、『和英対照 川柳歳時記』、私家版、1995、p.195.

(14) 岡田秀穂・エイドリアン・ピニングトン・速川美竹、『英訳つき川柳 万華鏡』、ザイロ、2000、p.40.

私は、(2)の現代川柳の翻訳のほうがより川柳の詩性が強く表出されているように思われる。

翻訳者の岡田秀穂は、日本の詩歌の翻訳においては、三行表記の各行にストレス（強勢）が2つずつ合わせて計6つある詩形で訳するのが最も価値ある翻訳法であると述べている。その方法を岡田は「詩脚合わせ」(foot-matching)と呼んでいる。ブライスの川柳の翻訳には、この翻訳法を意識せずに、この「詩脚合わせ」で訳出されているものが多く認められる。

岡田は、「リズム」「時間的長さ」「語義量」の3点の等価の見地から日本の伝統的な〈短詩〉を翻訳するには、この「詩脚合わせ」が最も合理的な方法であると述べている⁽¹⁵⁾。

また『万華鏡』が刊行された平成12年には、『英語俳句 ある詩形の広がり』の著書を持ち、アメリカ俳句協会会長であった佐藤紘彰が、平宗星編著『撩乱女性川柳』から代表的な女性川柳作家の川柳を82句選び、『モダン・ハイク』の春号に「女性川柳」の翻訳を掲載した。これは、アメリカのハイク専門誌に日本の女性川柳作家による現代川柳のアンソロジーが紹介された最初のものである。佐藤紘彰は、森中恵美子の「子を産まぬ約束で逢う雪しきり」を、次のような詩形で翻訳している⁽¹⁶⁾。

On a promise not to bear a child we meet snow ceaseless

作者の森中恵美子は、大阪の番傘川柳社を代表する女性川柳作家であり、その作品は「恵美子調」といわれる岸本水府の唱えた「本格川柳」である。

佐藤紘彰によるこうした「女性川柳」の翻訳の特色は、三行表記ではなく、一行表記で訳されているところにある。

平成19年（2007）には、みすず書房から詩人でエッセイストであるアーサー・ビナードの『日本の名詩、英語でおどる』が刊行される。彼は、アメリカのミシガン州出身だが、大学卒業と同時に日本に来日し、日本語で詩を書き、平成13年（2001）には、日本語で書いた詩集『釣り上げては』（思潮社）で中原中也賞を受賞している。また平成17年（2005）には、『日本語ほこりぽこり』（小学館）で講談社エッセイ賞を受賞している。

『日本の名詩、英語でおどる』の巻頭「過去という名の外国」という一文で、ビナードは、詩歌の英訳について次のように述べている⁽¹⁷⁾。

英訳は詩を外国へ旅立たせる交通手段になると同時に、日本の読者のためのもうひとつの入り口にもなる。もし過去が一種の外国なら、外国語を通して日本の名詩に分け入ることは、ちっとも不自然ではない。えらい遠回りに思われるだろうが、詩歌の場合は特急や直行便など必要なく、読み方の速さより深さが肝心だ。

ビナードは、詩歌の英訳の場合、「読み方の速さよりも深さが肝心だ。」と述べ、日本を代表す

(15) 岡田秀穂、「詩歌の翻訳におけるリズム・長さと言義量について—日本口語自由詩の英訳を中心に—」, 早稲田大学大学院文学研究科紀要, 第30輯, 1984, p.45-66.

(16) Hiroaki Sato, *A brief Survey of Senryu by Women*, Modern Haiku, Vol.34.1, 2003, p.67.

(17) アーサー・ビナード, 『日本の名詩、英語でおどる』, みすず書房, 2007, p.2.

る詩人たちの詩歌を英訳している。例えば、萩原朔太郎、山村暮鳥、中原中也、高村光太郎、与謝野晶子、柳原白蓮、室生犀星などの詩人や歌人の代表作が取り上げられ、それぞれの英訳には、原詩が並記され、日本語のエッセイもつけられている。注目すべきは、この中に「川柳界の小林多喜二」と呼ばれる川柳作家・鶴彬（1909－1938）の「プロレタリア川柳」が、10句取りあげられていることである⁽¹⁸⁾。ここでは、鶴彬の代表的な次の2句をあげておく。

万歳とあげて行った手を大陸において来た
手と足をもいだ丸太にしてかへし

ビナードは、この2句を次のように2行表記で英訳している。

When shipping out, those hands he raised
in a “Banzai”—they stayed on the continent.

Once the limbs are blown off
they send home a log of a man.

ビナードは、「一労働者として、一兵士として」鶴彬が「鋭く捉えた世界が、現代とぴったり重なる」と述べ、「屍のみないニュース」に「だまされてはいけない」と読者に警告している。ブライスによる川柳の翻訳は、こうした多様な「英譯川柳」の原点ともいえるものである。

(18) 同上, pp.97-102.

3. 鈴木大拙の禅思想とブライスの禅心

ブライスが禅と出合うのは、朝鮮時代である。まず鈴木大拙の著書を通して「禅」の思想に触れ、鈴木大拙の信奉者となる。その時の感動をブライスは「禅と鈴木大拙」と題する論文で語っている。またブライスは臨済宗、花園妙心寺の京城別院で華山大義老師のもとで参禅もしている。

鈴木大拙は1938年、『禅仏教と日本文化への影響』(*Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture*, p.28)の中で「禅とは、いつも自分の経験を尊び、如何なる体系の哲学とも妥協することを拒むものである。」(Zen always upholds its experience and refuses to commit itself to any system of philosophy.)と述べている。

また1959年のプリンストン版『禅と日本文化』(*Zen and Japanese Culture*, p.218)では、「悟りがなければ、禅ではない。」(Without satori there is no Zen.)と述べ、「禅と悟りとは同意語(シノニム)である」(Zen and satori are synonymous.)と述べ、「この悟りという体験の重要さは、今では、禅独特のものと見做されるようになった」(The importance of this *satori* experience has thus now come to be regarded as something exclusively related to Zen.)と指摘する。

ブライスは、こうした鈴木大拙の著作を通して禅の理解を深め、「ブライス禅」ともいえる強靱な論理に貫かれた個性的な禅論を展開する。特に1942年12月、北星堂書店より出版されたブライスの『禅と英文学』は、「英国人によって書かれた最初にして最高の禅に関する著作」(荒井良雄)であるといえるものである。

ブライスは、この著書の「序」で「禅」は「今日、世界で最強の力」(today the strongest power in the world)であり、「世界の文化の中に我々は最もはっきりと禅を見つける」ことができると述べている。

「ブライス禅」の最大の特徴は、『禅と英文学』(p.247)の中で「禅は詩である。」(Zen is poetry.)と規定していることである。ブライスの言う「詩」とは〈詩心〉とか〈詩情〉を意味する「ポエトリー」(poetry)をさす。ブライス流に言えば、「ポエトリー」は「禅心」といった意味である。つまり、ブライスにとっては作品が「韻文」(verse)であるか、「散文」(prose)であるかは問題ではなく、作者の「禅心」が表出された詩であることが重要なのである。

「禅は詩である。」というブライスが、日本の詩人として最高に評価するのが松尾芭蕉であり、英国の詩人として最高に評価するのがシェイクスピアである。

鈴木大拙は、プリンストン版の『禅と日本文化』(p.228.)でブライスの俳句観を、次のように紹介している。

俳句研究の権威R.H.ブライス博士から引用すると、「俳句は東の間の悟りの表現で、その中に事物の生命が見える」という。(中略)芭蕉はその17文字の中に物の本体への意味深い直観を示している。

ブライスの俳句観は、このように鈴木大拙の『禅と日本文化』の第7章「禅と俳句」(p.238)

の中で取り上げられている。大拙は芭蕉の「古池」の俳句を実例にあげ、「古池」の俳句には、異なる意識の層が重層的に描かれているという。

- (1) 蛙が「古池」に飛び込むという自然描写が「表層的」に描かれている層。
- (2) その下の層は「半意識」の層で、作者の「記憶」が描かれている層。
- (3) さらに深い層は「無意識」の層で、大拙はこれを「宇宙的無意識」と呼ぶ。

この第3の層の「宇宙的無意識」を芭蕉が直観し、その経験が「古池」に飛び込む蛙の句に表現されているのだと大拙は考え、「禅は俳句に近い」というのである。

4. ブライスの川柳の翻訳とユーモア

ブライスは、『俳句』（第1巻）で「ユーモア」を「俳句の技法」の第1にあげ、「ユーモア」は「詩と宗教にとって不可欠な要素」（an indispensable element of poetry and religion）であると述べている。

ブライスには、この「ユーモア」を題名に含む著作が三冊ある。すなわちそれは、『日本のユーモア』（*Japanese Humour*, 1957）、『英文学の中のユーモア』（*Humour in English Literature*, 1959）、『東洋のユーモア』（*Oriental Humour*, 1959）である。

ブライスは、『日本のユーモア』の中で川柳を「日本的なユーモアの最良のもの」と呼び、川柳に見つけた「ユーモア」を日本文化全体に広げ、考察する。

そして川柳を「一種の悟りを含む詩」とであると指摘し、川柳の「ユーモア」と「禅」を結びつけるのである。こうした視点は、鈴木大拙の禅研究には見られないブライス独自の視点であるといえる。こうした視点からブライスは川柳を「絶望から生まれる」詩であると考え、川柳を文芸として高く評価するのである。

『東洋のユーモア』では、「ユーモアは詩に相当する」（humour is equivalent to poetry.）と述べている。

さらに『東洋のユーモア』では、次のような現代川柳が紹介されている⁽¹⁹⁾。

A beggar
Really dirty
Just walks.

本当に汚い乞食ただ歩き

これは、「六大家」のひとりである川上三太郎（1891-1968）の現代川柳である。この他、「川柳中興の祖」といわれる井上剣花坊の近代川柳をはじめ、「六大家」の岸本水府（1892-1965）、前田雀郎（1897-1960）、麻生路郎（1888-1965）、相本紋太（1890-1970）や小説家の吉川英治（1892-1962）が「雉子郎」と号して発表した現代川柳も収録されている。

ブライスが、はじめて川柳という文芸の存在を知ったのは、朝鮮時代の宮森麻太郎の英文『古今俳句集』（*An Anthology of Haiku, An Ancient Haiku and Modern*, 丸善）を読んだ昭和7年（1932）であると考えられる。

この俳句の本には、およそ千句の古今の俳句の翻訳が収録されているが、その「序」で宮森は日本の俳句と西洋の短い諷刺詩「エピグラム」（epigram）を比較し、「日本の最短詩」の俳句が「自然」（“Nature”）を扱うのに対して西洋の「エピグラム」は「人事」（“human affairs”）を扱うと指摘し、西洋の「エピグラム」は日本の俳句よりむしろ川柳により似ていると指摘する。

(19) R.H. Blyth, *Oriental Humour*, the Hokuseido press, 1959, p.459.

この川柳の事例として宮森は、木村半文銭の現代川柳を、次のように翻訳し、紹介している。

It is a beggar's pride
That he has not a thieving mind. (Hammons)

盗み心のないが乞食の自慢なり

この現代川柳は、二行表記の英語で翻訳されているが、俳句の翻訳も、次のような二行表記の英語で翻訳されている。

The ancient pond!
A frog plunged — splash! (Basho)

古池や蛙飛び込む水の音

川柳をテーマにしたブライスの著書には、『日本のユーモア』や『東洋のユーモア』の他に英文『川柳』(*Senryu Japanese Satirical Verses*, 1949)をはじめ、吉田機司との共著『世界の諷刺詩川柳』(1950)、英文『川柳にみる日本人の生活と気質』(*Japanese Life and Character in Senryu*, 1960)、英文『江戸川柳』(*Edo Satirical Verse Anthologies*, 1961)などがある。

ブライスが英語による川柳の翻訳と解説をした英文『川柳』が北星堂書店から刊行されたのは、昭和24年(1949)であった。

この本の「序文」でブライスは、次のように主張している⁽²⁰⁾。

川柳を正しく鑑賞するには俳句との比較を通して理解するのがよいと思う。なぜなら俳句と川柳には日本人の特質がよくあらわれているばかりでなく、日本人の精神性もよくあらわれているからである。(中略)大抵の日本人や特にインテリと呼ばれる人々は川柳を低級なものと考えているが、それは全く不当な評価である。川柳は、文学としても、文化としても非常に高い価値を持っている。川柳こそ〈人生批評〉の詩であり、そこには人生哲学も暗に含まれている。

またブライスは「イントロダクション」(p.41)で俳句と川柳を比較して、俳句が「淋しさ」(loneliness)と呼ばれるものを表現する詩であるのに対して、川柳は「すべてのものを写し出す鏡」(a mirror that reflects all things)のような詩であると述べている。例えば、明治時代の「川柳中興の祖」といわれる井上剣花坊(1870~1934)の「新川柳」(p.27)には、次のようなものがある。

(20) R.H. Blyth, *Senryu Japanese Satirical Verses*, the Hokuseido press, 1945, preface, i.

Back from the flower-viewing, —
 Their house
 Is burnt to the ground!

花見から帰れば家は焼けている

ブライスは「人生はこのようなものだ。」といい、そこに〈人生批評〉の詩としての川柳の特色を見出している。

この「新川柳」には、ドラマティックともいえる人生のもつ「残酷さ」(heartless) が示されているが、それはフランスの小説家ギ・ド・モーパッサンの短編小説の世界を彷彿とさせるものがある。

ブライスは、この著書で川柳の起源を「前句付」(Maekuzuke) に求める。例えば、「切りたくもあり 切りたくもなし」(七七) という題(前句)に「盗人をとらえて見ればわが子なり」という「五七五」の句をつけたものを「前句付」という。この「前句付」の選者のひとりに柄井川柳(1718～1790)がおり、彼の雅号から川柳という文芸名が誕生する。彼は前句を省いて「一句にて句意のわかりやすき」ものを収録した『誹風柳多留』を刊行する。例えば、そこには、次のような「古川柳」が収録されている。

南無女房乳を吞ませに化けて来い
 これ小判たつた一晚居てくれる
 添乳して棚に鯛がござりやす
 子が出来て川の字形に寝る夫婦
 指のない尼を笑えば笑うのみ

ブライスは、こうした「古川柳」にみられる「川柳の技法」(Technique of Senryu) を、次のようにまとめる。

- (1) 口語的表現 (Colloquialisms) が用いられていること。
- (2) 詩的な簡潔さ (Poetic Brevity) があること。
- (3) 擬人法 (Personification) などの比喩表現が用いられていること。
- (4) 「新川柳」と異なり、「古川柳」では、匿名であること。
- (5) 川柳の「ユーモア」には「哀れみと笑い」(pity and mirth) がともなった「ペーソス (哀歎)」(pathos) が認められること。

初世柄井川柳の辞世の句には、「木枯や跡で芽を吹け川柳 (かわやなぎ)」がある。ブライスは、この辞世の句を、次のような英語で翻訳している。

The winter wind; —
But bud in days to come
O river willows!

私の所属している東京川柳会は、この初世川柳の川柳号を嗣号した14世の根岸川柳（1888～1977）によって創立された川柳結社であり、現在、16世の青田川柳が主宰を務めている。

ブライスは、昭和35年（1960）10月、川柳家の吉田機司と共著で『世界の諷刺詩川柳』（日本出版協同株式会社）を刊行する。これは、ブライスの著書を日本語で読める唯一の本である。内容は「詩としての川柳」「川柳の滑稽味」「俳句と川柳」「禅と川柳」「宗教と川柳」「性と川柳」などの各章を通して「川柳のいのち」とは何かについて論じられている。これらの内容は、前年に出版された英文『川柳』（*Senryu Japanese Satirical Verses*）で論じられたものをまとめたものである。例えば、「禅と川柳」の章では、「俳句の禅」と「川柳の禅」の違いを、次のように説明している⁽²¹⁾。

俳句において、禅とは自然の生命に入る事であり、自然の欲するものだけを、それ以上でも以下でもなく、欲する事であるから、花の咲く事も、散る事も、我々が心の奥深く密かに望んだ事が適って起ったまでの事である。

川柳では、我々は、人間の世界、すなわち、道徳、意志、知性、感傷、その他、自然界には無い方が気持ちのよい、あらゆるものによって、濁らされる流の趨向の中に存在している。しかし、ここでも我々は、泥の中に生きている蓮が泥であるように、禅で生きる事が出来る。俳句は寂しさ（loneliness）と呼ばれるものを持っており、それは利己心のないことであり、あらゆる強烈さや、誇張、不品行、罪悪等を避けた眼や耳の静寂さを意味している。他方、川柳は、あらゆる物を区別なく反射する鏡のようなものである。それは、心の暗い所で輝くそれ自身の光をもっている。川柳が斥ける唯一のものは、（中略）即ち俳句である。

この『世界の諷刺詩川柳』が刊行された年の10月29日、ブライスは、第2回の京浜川柳大会に出席し、次の川柳を日本語で出句した。

ねずみ取り買うぼんさんのまあい目

この川柳は、今日、ブライスが日本語で書いた唯一の川柳として知られている一句である。この作品には、ブライスのいう川柳の禅とユーモアが醸し出されている。

昭和36年（1961）2月、『川柳における日本人の生活と気質』の「序」でブライスは自分の歩んで来た人生を、次の5つの時期に分類し、それを「内なる運命」（inner destiny）と名づけている。

(21) R.H. ブライス・吉田機司共著、『世界の諷刺詩川柳』、日本出版協同株式会社、1950、pp.163-164.

- (1) 「生まれつきのアニミズム」(an inborn animism) の時期
- (2) 「仏教の基盤のひとつ」(one of the bases of Buddhism) である「菜食主義」(vegetarianism) の時期
- (3) 「俳句」と出会い、「俳句の道」(the Way of Haiku) を歩む時期
- (4) 鈴木大拙の著書を通して「禅」(Zen) に出会う時期
- (5) 吉田機司と出会い、「川柳の道」(the Way of Senryu) を歩む時期

この著書には、巻末に詳細な参考文献が掲載されているが、そこには、麻生磯次(1896-1979)の『川柳雑排の研究』や『滑稽文学論』をはじめ、前田雀郎の『川柳と俳諧』、根岸川柳の『古川柳辞典』、井上剣花坊の『川柳を作る人に』、吉田機司との共著『世界の諷刺詩川柳』なども掲載されている。

ブライスが「川柳の道」を歩き始めるのは、英文『川柳』を刊行した50代に入ってからであり、晩年の60代になるまで彼の川柳研究は続いた。ブライスにとって川柳は〈禅とユーモアと詩〉が三位一体となった文芸であった。

この著書では、第18章の「川柳のユーモア」(The Humour of Senryu)と第23章の「川柳の詩」(The Poetry of Senryu)が重要な章として扱われている。ブライスの川柳観を理解するためには、このユーモアと詩を、どのようにブライスが捉えていたかを考察する必要がある。

ブライスは、この著書の「イントロダクション」(p.4)で、「詩」(poetry)を「面白いもの、人や物の中の本当に価値あるものを直観力(intuition)によって知り、見る能力、より正確に言えば、それは興味を創造することであり、価値を創造することである。」といい、「ユーモア」を「事物の本性の中に本来、備わっているパラドックスを起因とし、人々を喜ばせ、感情に左右されないパトス(pathos)である。」と述べている。このようにブライスは、詩とユーモアを等価値なものとして認識している。この二つは、同じものの違った局面であるといえるかもしれない。これを禅の観点からいえば、〈詩は悟り(satori)であり、ユーモアである。〉と言えるだろう。

ブライスは、この著書の第18章を通して「川柳のユーモア」(pp.311-329)を、次の10項目にまとめている。

- (1) 「無慈悲なユーモア」(Grim Humour)

Going to desert her child,
She gives it
All the milk she has.

今捨つる子にありたけの乳飲ませ

母親が今、わが子を捨てようとしている。せめて最後に「ありたけの乳」を飲ませてやりたいという親心があらわれている川柳だが、ブライスは「無慈悲」な行為と「親心」という「矛盾した言動」(contradiction)が、この川柳にみられることからこの句を「無慈悲なユーモア」の事例としてあげている。

(2) 「悲劇的なユーモア」(Tragic Humour)

He hanged himself
At Ueno,
Facing the Yoshiwara.

吉原へ向いて上野で首をつり

ブライスは、この川柳をシェイクスピアの悲劇と川柳の「ユーモア」が結合された「悲劇的なユーモア」の事例としてあげている。

(3) 「アイロニー (Irony) としてのユーモア」

Both of them
With whiskers,
Loves of the cats.

両方にひげのはえてる猫の恋

ブライスは、この川柳の「猫の恋」に同性愛 (homosexual) の趣を感じている。

(4) 「比喩的な言葉のユーモア」(Linguistic Humour)

Gripping the empty air,
He throws back his head,
“What an interminable day!”

虚空を掴み反りかへり永い日だ

この川柳は「七五五」の「内在津」の韻律で構成されている。ブライスは、原句の「虚空を掴み反りかえる」の比喩的な言葉の表現に注目し、そこに「比喩的な言葉のユーモア」を感じている。

(5) 「温和なユーモア」 (Kindly Humour)

Every shower,
The man of virtue
Lends and loses one.

夕立のたんびに仁者貸しなくし

この川柳は、「夕立」のたびに傘を「貸し」、それを「なくし」、暮らしている「仁者」の姿を描いている。こうした川柳にブライスは、「思いやりのあるユーモア」を感じているのである。

(6) 「シェイクスピアのユーモア」 (Shakespearean Humour)

Sometimes when it's a wife,—
How much more so
In the case of a widow!

有ってさへ況や後家に於いてをや

シェイクスピアの喜劇にみられる「ユーモア」は「機知」(wit)、「簡潔さ」(brevity)、「人間性」(humanity)、「赦し」(forgiveness)、「理解」(understanding)、「必然性」(inevitability)など、あらゆる種類の性質が独特に結合されて起こるものである。ブライスは、シェイクスピア劇に登場する人物の中でこの喜劇的な「ユーモア」を体現しているのが、フォルスタッフであるという。彼がこの川柳を見たら、きっと喜ぶだろうと述べている。

(7) 「穿ちのユーモア」 (Humour of Exposed Pretence)

When he stops
Being in love with himself,
Who will love him?

自惚れを止めれば外に惚れ人なし

真実の自己を隠している人の仮面を剥ぎ取り、暴露したいという欲望は誰でも抱いている。人が本当の自分を晒すのを嫌がれば、嫌がるほど、私たちは、それを見たがるものだ。川柳では、人情の機微を巧みに言い表す視点を「穿ち」というが、「穿ち」には、知られていない事をあばくという意味もあるので、ここでは、「穿ちのユーモア」という語をあてた。ブライスは、この川柳には、スコラ哲学者のトマス・アクイナスの哲学の範囲を越えた深い哲学があると述べている。

(8) 「間接的なユーモア」 (Humour of Indirectness)

間接的な表現の中には、何かしら滑稽コミカルなものがある。

Knowing nothing about it,
“Many thanks for your kindness
While I was away.”

とは知らずさぞ留守中はお世話様

翻訳の一行目の ‘it’ は、夫が礼を言っている相手の男と自分の妻との関係を意味している。この川柳の間接な言葉 (obliquity) とその曖昧さ (obscurity) は、人生が時には、非常に重要に思われることにはかまわず、流れていくものであることを示している。

(9) 「愚行のユーモア」 (The Humour of Stupidity)

多くの笑いは「優越感」 (a sense of superiority) によって引き起こされる。ブライスは、この事例として次の川柳をあげる。

In a tête-à-tête over the brazier,
They both fidgeted with the fire,
And put it out.

内談の火鉢二人でいぢり消し

「二人」は「火鉢」越しに「内談」に夢中である。自分たちのしている事に気付かず、「火鉢」の火を消してしまう情景が描かれている。

(10) 「パロディ (Parody) としてのユーモア」

「パロディ」とは、よく知られた文学作品の文体や韻律を模して滑稽化する文学作品の一形式のことだが、その面白さは原作となっている文学作品を知らなければ、理解できない。ブライスは、この事例として次の川柳をあげる。

House-imprisoned,
My dreams hover
Over a prostitute quarter.

座敷牢夢は廓をかけめぐり

ブライスは、この川柳が次の芭蕉の辞世の句の「優れたパロディ」(excellent parody)であると述べている。

Ill on a journey,
My dreams hover
Over a withered moor.

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

江戸時代には、この「パロディ」の技法がよく使われ、こうした技法の使われた川柳は「狂句」と呼ばれた。明治以降は、こうした「狂句」は否定された。

またブライスは第23章で「川柳の詩」(p.457)について次のように語る。

川柳は多くの点において詩である。(中略)それは俳句と同じ意味で詩である。それは私たちに事物や人間性の本質、特色、象徴的な点およびあらゆるもの(いのち)を見せてくれる。川柳には、季語がないが、俳句と同じように簡潔である。川柳と俳句の違いは、言葉遣いと世俗的な親しみやすさである。

ブライスが指摘するように川柳は〈口語的表現〉を用いるのに対して俳句は〈文語的表現〉を用いる。また川柳は季語を用いず、〈人事〉を詠むが、俳句は季語を用い、〈自然〉を詠む。

さらにブライスは『世界の諷刺詩』の「俳句と川柳」(p.154)で両者の相違を次のように述べている。

川柳と俳句の大きな相違は、俳句が老年のものであり、人生の精華であるのに対し、川柳は、苦難、不幸、屈従時のものである。川柳は、地中の迷路を手探りでいく人生という苦い根を表現するものなのである。

ブライスは、次のような「古川柳」に、こうした「川柳の詩」(the poetry of Senryu) を認める。

As if after thinking it over,
A raindrop
Falls.

考へた様に雨垂れ一つ落ち

川柳では、擬人法を用いて無生物に人間の「いのち」を与える。ブライスは、この川柳に19世紀のアメリカの詩人エミリー・ディキンソン(1830～1886)の詩と同じ詩性があると指摘する⁽²²⁾。

この「古川柳」は、鎌倉時代の京都・大徳寺の禅僧の大燈国師(1282～1338)が作った次の和歌が踏まえている。

耳に見て目に聞くならば疑はじおのずからなる軒の玉水

大燈国師は禅でいう「正見」をこの和歌で表現しているが、シェイクスピアの喜劇『真夏の夜の夢』(IV. i)でも、妖精の世界からボトムが人間の世界に戻った時に言う「人間の眼は聞いたことがなく、人間の耳は見たことがない。」の科白には、禅でいうこの「正見」が認められる。

またこの「古川柳」では、「雨垂れ」が題材にされているが、現代川柳にも、次のような「雨垂れ」を題材にした作品がある。

最後の雨だれ夜の空がへこんだ

この川柳を書いたのは、川柳宗家の14世・根岸川柳である。この作品では、「最後の雨だれ」と「夜の空がへこんだ」が〈二物衝撃的〉に描かれている。こうした構成の川柳を「二句一章」と呼ぶ。「夜の空がへこんだ」の表現は、根岸川柳が好んで用いた表現で、名詞の「夜」を動詞化したものである。「四四・三三四」の「内在律」が用いられている。作者は猫好きで、飼っていた猫が死んだ時の悲しみをこの作品で描いている。「最後の雨だれ」は、作者の悲しみの涙の〈最後のひとしづく〉の比喩表現である。根岸川柳作品集『考える葦』(東京川柳会蔵版、1959)に収録されている現代川柳である。

昭和36年9月にブライスが書いた英文『江戸川柳』は、彼の書いた最後の川柳書の翻訳集である。この本には、『誹風柳多留』の出版される以前に刊行された慶紀逸(1694～1761)によって編まれた俳諧の前句付集『武玉川』の作品が多く収録されている。

『武玉川』に収録されている前句付には、「七七」の14音の〈短詩〉が多く収録されている。例えば、次のような詩情豊かな作品が二行表記で訳されている。

(22) R.H. Blyth, *Japanese Life and Character in Senryu*, the Hokuseido press, 1960, p.465.

Where he fell down
The thin snow is blue.

転んだ跡の青い淡雪

The stone image of Jizô
He clean lips.

石の地蔵の清い唇

The fifth finger
Has become my wife.

女房にした五本目の指

To a woman's ear
The oracle falls somewhat short.

女の耳に足らぬ神託

Onto the lonely face
A mosquito comes to die.

淋しい顔へ蚊が死に来る

ブライスは、こうした「七七」の作品の中で「女の耳に足らぬ神託」は、悲劇『マクベス』のマクベス夫人の姿を語っていると述べている。

また『誹風柳多留』に収録されている川柳は、三行表記で訳されている。

The full moon shines
Upon the back
Of the cow returning.

満月の背中へあたる戻り牛

ブライスは、この川柳が、きわめて詩的であると指摘し、この情景には、英国のロマン派詩人のジョン・キーツ（179～1821）の代表作のひとつ「ギリシアの古壺に寄せる頌歌」(*Ode on a Grecian Urn*, 1919) の情景を彷彿とさせると述べている⁽²³⁾。

ブライスは、『江戸川柳』で、次のように「笑い」と「ユーモア」の違いを簡潔に説明している⁽²⁴⁾。

笑いはユーモアにとって本質的なものではない。笑いは驚きの要素の結果である。ユーモアは心をくすぐることであり、それは知的で、諷刺的で、滑稽的で、詩的なもの、あるいは、これらの混合であるようなものである。

ブライスが指摘するように川柳にとって「笑い」(laughter)は本質的なものではなく、「驚き」(surprise)の要素の結果にすぎないのである。重要なのは、「ユーモア」である。「ユーモア」は「心をくすぐること」(a tickling of the mind)であり、それは、「知的」(intellectual)で、「諷刺的」(satirical)で、「滑稽的」(comic)であり、「詩的」(poetic)なものであり、またはこれらの要素の「混合」(a mixture)したものである。

『川柳』から『江戸川柳』までの約10年間にブライスが訳した「諷刺詩」(Satirical Verses)の総数は、3742句にも及ぶ。これは、俳句の英訳の総数2645句をはるかに上回るものである。

ブライスがこれほど俳句よりも川柳を愛したのは、そこに日本の「ユーモア」と「禅」の結合を見出したからに他ならない。

ブライスの言う禅は詩(poetry)と同意語であるから川柳という文芸にブライスは、シェイクスピア劇にみられる〈悲劇的要素〉と〈喜劇的要素〉が融合された「バロック的ユーモア」とも呼べる「禅のユーモア」を見出したと考えられる。

最後にブライスの求めたシェイクスピア劇の「バロック的ユーモア」が、どのようなものかを『禅と英文学』の第28章を通してみたい。

(23) R.H. Blyth, *Edo Satirical Verse Anthologies*, the Hokuseido press, 1961, p.256.

(24) 同上, General Introduction, xiii.

5. シェイクスピア劇の「バロック的なユーモア」

シェイクスピア劇にみられる「バロック的なユーモア」は、四大悲劇の『ハムレット』『オセロ』『リア王』『マクベス』によくあらわれている。

ブライスは、『禅と英文学』（pp.425-435）でシェイクスピア劇にみられるバロック的な変幻自在な性格は「シェイクスピアの禅」（Shakespeare's Zen）によるものであると主張した。例えば、『リア王』の第5幕第3場で叫ぶ主人公の次の科白には、「シェイクスピアの禅」があらわれているという。

No, no, no, life!
Why should a dog, a horse, a rat, have life,
And thou no breath at all? Thou'lt come no more,
Never, never, never, never, never! (V. iii. 304-307)

もう、もう、命がない。
犬にも、馬にも、鼠にも命があるのに、
お前には、なぜ、息がなくなった。お前はもう帰って来ない、
いつまでも、いつまでも、いつまでも、いつまでもだ。
(斎藤勇訳)

また『ハムレット』の第5幕第2場の次の科白にも禅が認められるという。

There is special providence in the fall of a sparrow.
If it be now, 'tis not to come; if be not to come,
it will be now; if it be now, yet it will come.
The readiness is all. (V. ii. 215-218.)

雀一羽落ちるにも天の摂理がはたらいている。
いま来るなら、あとには来ない。あとで来ないなら、
いま来るだろう。いま来なくても、いずれは来る。
覚悟がすべてだ。(松岡和子訳)

この「覚悟がすべてだ。」という科白は、まさに「シェイクスピアの禅」をあらわす言葉だが、「雀一羽落ちるにも天の摂理がはたらいている。」という科白には「禅の悟り」の境地が認められる。

さらにブライスは、第20章（pp.304-315）で禅の本質を「無執着」（Non-attachment）にあると考える。すなわち「あらゆるものに対する執着を断ち切ることが禅である。」というのである。

ブライスは、「執着」(attachment) がすべての不幸の原因であり、悲劇の起因であると考え。そのよい例が、『オセロー』の悲劇である。オセローのように悲劇の主人公となる人間を救うのが「禪」なのである。

ブライスは『オセロー』の第1幕第3場の大公の科白に「シェイクスピアの禪」があらわれているという。

When remedies are past, the griefs are ended,
By seeing the worst, which late on hopes depended.
To mourn a mischief that is past and gone,
Is the next way to draw new mischief on. (I . iii . 202-205)

施すすべのつきた時には、かえって歎きは終るものだ。
最悪を見てそれまでの希望を失えばいい。
過ぎてかえらぬ不幸をくやむのは
さらに新しい不幸を招くことになる。(菅泰男訳)

ここで大公のいう「最悪」とは、「罪」であり、「苦悩」であり、「死」である。

主人公のオセローは、『オセロー』の第5幕第2場で、イアーゴウの言葉を信じて無実のデズネモウナを殺害するという「最悪」の「罪」を犯してしまうのである。

6. おわりに

ブライスの著書を通して川柳が、どのように海外に紹介されたかを考察してきた。その結果、ブライスが川柳を禅の視点を通して日本文化を代表するものとして取り上げ、そこに日本人としての特性を見出していることがわかった。

ブライスの禅に対する考え方は、鈴木大拙の著書を通して培われたが、やがて独自の「ブライス禅」とも呼べる論を展開するようになる。その「ブライス禅」の最大の特徴は「禅は詩」であり、「禅はユーモア」であると規定したことである。ブライスは、俳句の研究を通して「禅は詩」であると論じ、川柳の研究を通して「禅はユーモア」であると規定した。ブライスにとって〈禅と詩とユーモア〉は三位一体のものである。特に「ブライス禅」では、俳句はもとより、川柳を重視し、そこに〈日本のユーモアと禅〉を見出しているのである。

ブライスは、禅の観点から日本人以上に川柳という文芸を俳句と対等に論じ、両者の相違点を理解した禅の研究者であり、日本文学の研究者でもあり、比較文学の視点を身につけ、日本と英国の融合文化を実践した国際人でもあったと結論づけることができる。

謝 辞

この論文は、2017年5月13日（土）東京・阿佐谷ワークショップにて開催された国際融合文化学会の春季大会で口頭発表したものを論文としてまとめたものである。

論文を書くにあたって国際融合文化学会の会長である宗片邦義先生（静岡大学名誉教授）のブライス関連の著作や荒井良雄先生の著作から多くの示唆を受けました。

またブライスの日本語による川柳作品の資料を「川柳マガジン」を発行している新葉館出版から提供を受けました。この場を借りて心より感謝の意を表したいと思います。

参考文献

〈ブライスの主要著作集および関連文献〉

- Zen in English Literature and Oriental Classics*, the Hokuseido press, 1942.
Haiku: Eastern Culture, 4vols, the Hokuseido press, 1949-1952.
Senryu: Japanese Satirical Verses, the Hokuseido press, 1949.
『世界の諷刺詩川柳』（吉田機司と共著）、日本出版協同株式会社、1950.
Japanese Humour, Japan Travel Bureau, 1957.
Oriental Humour, the Hokuseido press, 1959.

- Humour in English Literature*, the Hokuseido press, 1959.
Japanese Life and Character in Senryu, the Hokuseido press, 1960.
Edo Satirical Verse Anthologies, the Hokuseido press, 1961.
平川祐弘, 『平和の海と戦いの海』, 新潮社, 1983.
川島保良編, 『回想のブライス』, 回想のブライス刊行会事務所, 1984.
荒井良雄, 『英語英文学と共に』, 新樹社, 1984.
Kuniyoshi Munakata and Michael Guest (edited), *Essentially Oriental R.H.Blyth Selection*, the Hokuseido press, 1994.
The Genius of Haiku, Readings from R.H.Blyth, the British Haiku Society, 1994.
吉村脩久代, 『R.H. ブライスの生涯 禅と俳句を愛して』, 同朋舎出版, 1996.
Yosio Arai, *Zen in English Culture—Understanding Blyth Zen*, the Hokuseido press, 2005.
荒井良雄編, 『R.H. ブライスの人間像—俳句と川柳に禅を求めて—』, 北星堂書店, 2006.
上田邦義, 『ブライス先生、ありがとう』, 三五館, 2010.

〈鈴木大拙の主要著作集〉

- Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture*, The Eastern Buddhist Society Otani Buddhist College Showa X III, 1938.
Zen and Japanese Culture, Princeton University Press, 1959. 『鈴木大拙選集』, 第9巻, 春秋社, 1952.